

2024年9月1日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教8「天の祝宴」

創世記2：1～3、ヨハネ2：1～12

イエスさまは、ある婚礼に招かれています。イエスさまの母マリアも婚礼に同席していました。マリアはイエスさまに「ぶどう酒がなくなりました」と伝えています。ある意味、他の婚礼の客は知らないような、内輪のことを知っていることから、この婚礼はマリアの近い家族や親類の結婚式だったのかもしれませんが。そう考えると、マリアはむしろ結婚の主催者の立場であろうと思われます。主催者の立場になりますと、何でもそうですが、そこで準備から後片付けまでいろいろと忙しい。結婚式はユダヤでも盛大に行われたようでして、一週間も続いたと言われます。一週間続くお祝いなら、どれだけの準備が必要でしょうか。準備万端整えて、これで大丈夫と当日を迎えた。ところが不測の事態が起こるのです。どんなに準備を重ねてきても、そういうことは起こり得るのです。よりによって祝いの席に欠かせないぶどう酒がなくなってしまった。それは結婚を主催する側としては、あってはならないことでしょう。でもそれが起こるのが、わたしたちの人生なのです。準備万端整えたつもりでも、どこかに綻びが生じてくる。足りていると思っても足りていない。そこに人間の不完全さがあり、同時に神さまから離れた罪の現実があります。

結婚式は、何より喜びのときです。それは神さまが「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」（創世記2：18）と言われて、その人生のパートナーを備えてくださった。「ついにこれこそ、わたしの骨の骨、わたしの肉の肉」（2：23）と呼べる相手に出会った。ところがその喜びが尽きてくる。愛が尽きてくる。その時は一生添い遂げる確信があったかもしれない。でも何かをきっかけにして一緒に生きることができなくなってくる。そこに人間の不完全さがあります。それでも婚礼の主催者であると考え人間は、何とかそれを自分で解決しようとする。必死でその欠けを補おうとするのです。それがこの母マリアの「ぶどう酒がなくなりました」の一言に込められている正直な人間の感情ではないでしょうか。

けれどもその訴えに対して、イエスさまは何とも素っ気ない反応をなさいます。「婦人よ、わたしとどんなかわりがあるのです」（4節）この言葉をどう理解すればよいのでしょうか。これは原文では「わたしとあなた、そこに何ががあるのか」という文章です。ぶどう酒がなくなり慌てふためく主催者側と、わたしとは何の関係があるのか、一緒にしないでくれと言わんばかりです。でもよくよく考えてみればそうではないでしょうか。そのように喜びが尽きていく、愛が尽きていく、そういう欠けのあるわたしたち人間と、まことの神さまであるお方は本来かわりがない。むしろ相容れない存在なのです。罪ゆえに神さまと人間との間には深い断絶があります。神さまはこの婚礼の主催者側になって慌てふためく立場ではないのです。

けれども、その慌てふためくわたしたちに神さまがかかわりを持ってくださる。その喜びの尽きたところ、愛の尽きたところにイエスさまが同席されていることが救いです。マリアは召し使いたちに「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言いました。ここが重要です。ここでこの結婚の主催者が入れ替わるのです。それまでは不完全なわたしたちが婚礼の主催者でした。それは自分の人生の主催者になろうとすることです。どんなに欠けがあっても、必死で取り繕うとしてきた。けれども、ここからは完全なお方、すべてを完成に導くお方が人生の主催者になられました。

ここにユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてありました。清めの水は、ユダヤ人が神さまの御前に自分を清めるために用いたものと考えられます。イエスさまはその水がめに水をいっぱいに入れなさいと召し使いたちに指示をなさいます。召し使いたちはその通りにいたします。そしてそれを宴会の世話役のところへ持って行きました。するとその水はぶどう酒に変わりました。世話役はそのぶどう酒の味見をします。そこで思わず花婿を呼んで言うのです。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったところに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました」(10節)と。それは世話役も認める最高のぶどう酒でした。

イエスさまがこの結婚式の主催者になられ、この結婚の危機を救われました。それは単なる結婚の危機からの救いではありません。それは欠けのあるわたしたちを補い満たしてくださる神さまの恵みを表しています。水はユダヤ人が自らを清めるために用いました。でもその水をイエスさまはぶどう酒に変えられます。ぶどう酒は、最後の晩餐のぶどう酒を思い起こさせます。それは十字架で流されるイエスさまの血を意味しています。もはや、わたしたちはその欠けを必死で満たそうとして、自分で自分を清める必要はなくなりました。イエスさまがその血を持ってわたしたちを清めてくださる。御前に義としてくださる。その救いが示されています。

さらに「三日目」という言葉で、すぐに頭に思い浮かびますのは、イエスさまのよみがえりです。イエスさまによる新しい創造は、神の小羊として、自らを十字架で犠牲にしてわたしたちの罪を贖い、さらには三日目によみがえられ、そのよみがえりの命を持って、もう一度、わたしたちを神の子として新しく造り変えるということに他なりません。ルターは、被造物を変える救いがここにあると言いました。水がぶどう酒が変わる。単にそれだけではない。罪のわたしたちが神の子とされる救い。天地創造のときに、神さまがすべてを良しとされた、新しい人間の創造がここに始まったのです。

以前、このカナの婚礼の「三日目に」(2:1)に注目して、これまでの日数とこの「三日目」の三を足すと七日になる。七日目は創造の完成の日、神さまが安息なさった日。それゆえにこのカナの婚礼は、新しい創造の完成、その完成を祝う祝宴と理解することができるという話をしました。まさにこの七日目の安息をキリスト教会では、イエスさまのよみがえりの日、週の初めの日、日曜日をここに当てて毎週神さまを礼拝しています。わたしたちはイエスさまの十字架とよみがえりによって、罪赦されて、神さまの子とされました。それは罪に支配されない新しい人間として歩み出すことに他なりません。その救いを喜び祝い、わたしたちはここに集まり礼拝をするのです。どんなに欠けがありましても、弱さを抱えていても、自分で満たすのではない。自分で自分を清めるのでもない。イエスさまがわたしたちの人生の主権者となられ、すべてを整えてくださる。完成させてくださる。そのような人生を歩むことができるのはまことに幸いなことではないでしょうか。

天の父よ。欠けのあるわたしたちです。準備万端整えたつもりでも、綻びが出てきます。けれどもその欠けを自分で満たすのではなく、イエスさまがそのために来られ、ご自身の命をもって、この綻びを繕い、すべてを補い満たしていただきました。どうぞ、そのイエスさまがわたしたちの人生のまことの主権者であられることを喜び感謝して歩む者とさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。